たち上った県民協

明るい県政を我等の手で

舎県民はその政党支持の如何を問わず、すべて土屋知事の即時退陣を望んでいる。

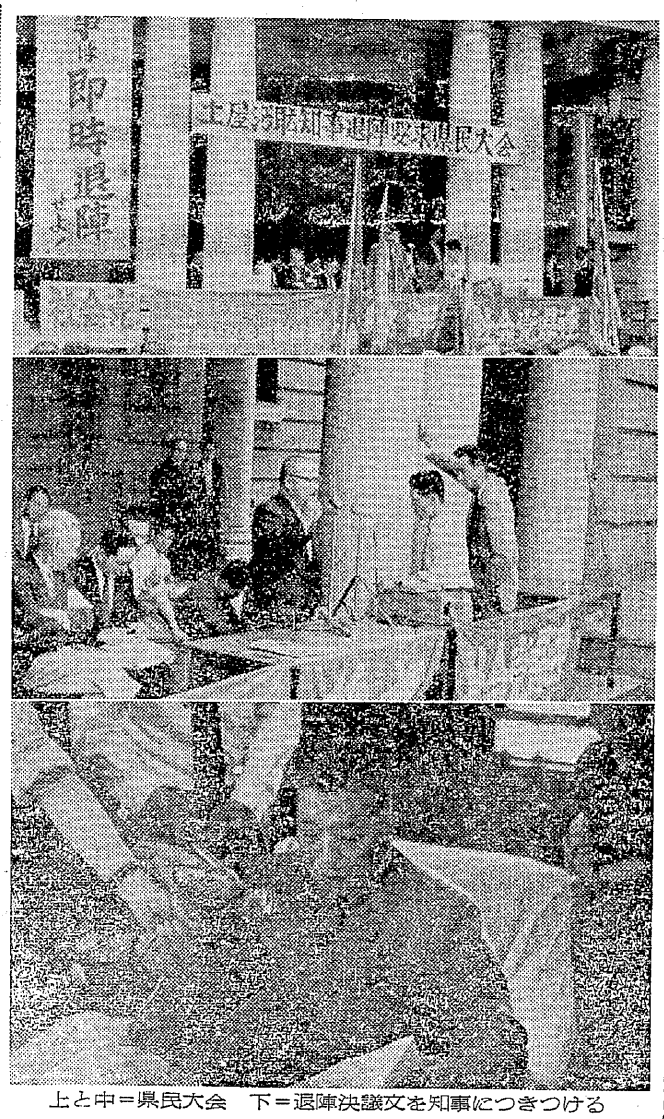
山本副知事らが逮捕された直後、三月三十日県庁前広場で総評、社会党を中心とする民主団体によって土屋汚職県政糾弾県民大会がひらかれ、真相を究明し、県民の手により明るい県政をとりもどすため土屋県政汚職糾明県民協議会（略称県民協）を結成することが協議された。この決議にもとずき四月三日広汎な民主団体参加のもとに県民協議会が結成され、県議会内に設置された特別調査委員会と呼応してひろく県民に事件の真相を知らせる運動を展開、四月十三日から三十日までの間に、県下八十カ所で「汚職県政の実態をつく」報告会を開催するとともに、ニュースカーによる街頭宣伝やチラシ、パンフレットの配布などによって与論の喚起につとめ、さらに下部組織としての地区協議会の組織化をはかってきたが、この方は必ずしも満足すべき成果をあげ得なかった。

しかしその後小林議長ら二百三十万円を山本副知事から受けとった疑いで逮捕され、その仙関係者の検挙や参考人としての事情聴取者が続々と検察庁に喚問され、県政の乱脈がますますはっきりするにつれ、三百八十万県民総りのこえは、五月一日、県下三十余カ所でひらかれたメーデー大会における土屋知事退陣要求となり、病床にある知事に手渡された。

このような情勢の中でようやく知事リコールの声がたかまり、社会党では総評と話合いの結果「最終的にはリコール運動を起す。その時期については政治的情勢によって判断する」との結論を出し、支部代表者会議にはかり、その態勢を確立をはかることにした。

五月三十日から開かれた臨時県議会を前に、県民協では二十七日第三回幹事会をひらいて対策をねり野党三派から提出を予定される土屋知事辞任要求決議案のバックボーンとして県民のこえを結集するため、六月一日十二時半から県庁前広場で「土屋汚職知事退陣要求県民大会」を開催した。

この大会で「土屋知事即時退陣」を決議し、知事公舎にデモを敢行、面接を要求したが、秘書課員が出てきて「知事は居らぬ」と回答したのでデモ隊は座り込みに入ったところが午後三時二十分になって三原副議長の斡旋により不在の管の知事が代表と会おうと申入れてきたためデモ隊はフンゲキし、小田部秘書課長らをニュースカーの上にのせ約三十分にわたって陳謝を要求した。すったもんだの末午後四時に至り知事と面接、決議文を手渡したが、これに対し知事は退陣することだけが責任をとる道ではない」と居すわりをあきらかにした回答を行ったため代表団は激しく知事の態度をなじり、モミクチャの中に会見を打切った。



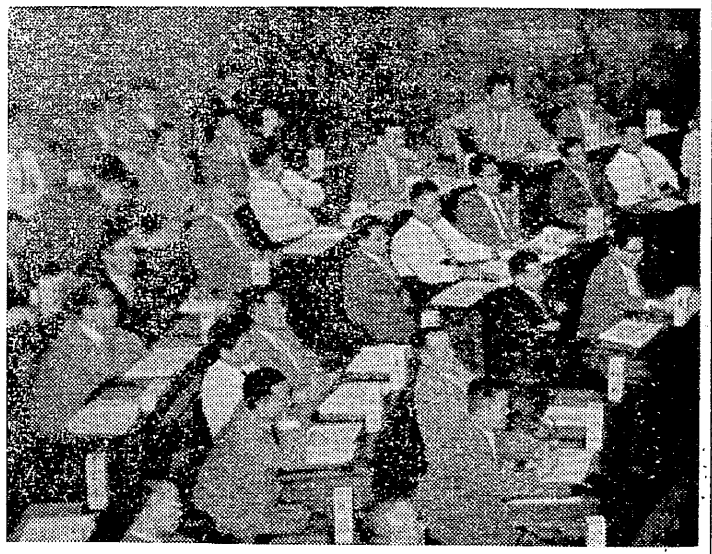
上と中＝県民大会　下＝退陣決議文を知事につきつける

退陣決議案やぶる

一方県議会の方はどうかというと五月県議会を前に、知事退陣を迫る勢力（社会党二五名、県政同志会六名、農協議員団九名、計四〇名）と知事ヨーゴ派（自民党二五名、新公正会四名、新政会一〇名計三九名）に大きく二分される情勢にあったが、さてフタをあけて六月三日全県民注視のうちに退陣決議案が上提されてみると情勢の大変化が判明した。すなわち社会党の牛島議員が子息の病気を理由に不参加を出して二便の飛行機で東京に去り、県同の若崎議員が急病で小倉病院に入院して欠席のため決議案賛成は三十八票、反対三十九票となり、全く逆転の形勢となった。

社会党はただちに対策をねり、牛島議員をつれかえすよう手配したが時すでにおそく、採決には間に合わなかった。

議場の傍聴券も大半を暴力団をまじえた保守派によってしめられ、議会対策戦術もお手あげの状態となり、会期一日延長により四日午前二時、知事退陣決議案は賛成三十八票、反対三十九票で否決され副知事に向坊氏（県議青委員）出納長に波多野氏（商工水産部長）が承認可決され、土屋県政の建直し再発足を見るに至った。


退陣決議案上提の日の県議会

残るはリコールのみ

県民の力で退陣させよう

その後県民協は土屋知事退陣要求の闘いをすすめるためにリコール闘争の展開以外にはないとの確認のもとにその具体的準備活動にとりかかっているが、これは相当困難な仕事で、今後余程のねばりと努力が必要とされている。

一方土屋知事は臨時県議会を乗り切って以来県庁幹部の大移動を行い、六月十五日には一身上の弁明工作と思われる県政報告会を浮羽郡吉井町で開催するなど〝人のうわさも七十五日〟のことわざをたくみに悪用し、居座りによりやく自信をとりもどした観がある。

これらの動向の中で、県民の関心も次第に汚職問題から遠ざかろうとしているかのようだが、然し土屋県政に対する疑惑と不信の念がとりさられたわけでは決してない。

汚職問題をケイ機として県政の刷新を革新勢力に期待している県民は、その怒りをどこにぶちまけてよいやらわからぬ状態である。

知事が当然とるべき政治責任をとらずあくまでも権力の座にしがみつき、与党もまたこれを支持するとすれば、もはやわれわれ県民大衆の力で退陣させるほかない。

その方法には二つある。一つは県議会において不信任を決議し、県議会の力で倒すやり方だが、これには議員三分の二の出席のもとに四分の三の賛成を得なければ成立しないし、すでに五月臨時議会で失敗に帰した。

だとすると残る唯一の方法はリコールだが、民主国家として当然の規定であるこのリコールも、実際はそのこみ入った手続きと長期にわたって困難をおかしてリコールにたちあがる所以もここにある。

運動と多額の費用によってなかなか困難な問題である。

然しどうしてもこれ以外に道がない以上あえて全県民の意志を結集してこの運動を展開しなければならない。またそれをやりとげるだけの力をもつのでなければ汚職県政はいつまでたってもよくならないだろうし、これを準備する運動の中ではじめてただ単なる批判運動ではない「県民のための県政」とする地方自治本来の活動もうまれてくるであろう。さらにまたそうすることによって右コ左ベンする中間派の議員もほんとうにわりきって県民とともに戦列に加わることも期待される。

このような運動を展開してはじめて汚職土屋県政は自ら崩壊するにちがいないのである。

土屋知事は知つていた

土屋知事である。その住宅協会が、資金ぐりが苦しいために預託願いを出し、程なく一億円は不必要となったばかりでなく、預託願を出したことすら忘れたゞことになる。

○…住宅協会への貸付金というヒモつき預託金を四カ月後に借用組合運営資金に名目がえしたとき知事は決裁しているのだ。とくにこの預託はその後三回切り替え更新しているからなおさらである。

○…三月三十日新聞記者に「大石検事は検挙前に二、三回来宿して山本副知事を取調べているが知事は知らなかったか」と聞かれた土屋知事は〝知らなかった〟と答えていながら、五月六日県政特調委の臨床尋問で「二月十三日に知つて八千万円の至急回収方を命じたこと、その他」を認めた。

ウソでごまかせる間は「知らなかった」で通し、ごまかせなくなった部分だけを認める知事の態度は最初から全部知っていたことを現すものだ。

×　×

「予算関係で度々上京して留守だったから直接聞いていない」

土屋知事は今度の事件を「全く知らなかった」と云っているが、そうは思えないフシが多い。以下それを列挙してみよう。

○…今度の事件は山本副知事はじめ県政四本柱の中の三人が、しかも知事のために計画遂行した事件である。まちがったら政治生命にかかわる冒険を、土屋知事大事に仕えてきた山本氏が無断でやったとは常識では考えられない。

○…問題の一億円を県金庫から移すために名儀を使われたのは県住宅協会であり、その理事長は

賢い人にはかなわない？

福岡県〝汚職事件〟について

九大教授　井上正治

「ものはいいようで……」カドがたつではなく、どうにでもなるこれは法律の世界のはなし。姦通罪というのがあつた。これは、相手の女に夫があるのを知らなかった、といえばなんとか救われる道もある。賄物罪で処罰するには、犯人が盗品たることを知っていなくてはならない。だから、ここでも知らなかつたとがんばられればどうにもできなくなる。法律をたちようとでも聞きかじつたものが、その知識を乱用する気になれば、悪を白といいくるめるぐらい困難ではない。そんなバカなことがあるものか、というところから、アメリカの刑法は犯人の考え一つで犯罪の成否を左右するようなことを許さない。わが国の理論は、アメリカよりもつとち密なためかかえつてそこに盲点がある。

こんど福岡県に起つた副知事の第一相互への導入預金事件も、この前まで、背任とか横領とかさわいでいたのに、収賄罪に切りかえられるとか。ところが、この収賄罪は、実に認定がむずかしい。副知事も、要金刑一千万円は、たんに商取引として受け取つたものといいはつているとか。事実の真否は裁判にまとう。しかし、もし追われる身の逃げ口上だとすればこれでは収賄罪はなかなか成立しない。それに、知能犯となれば、証拠となるものをウカツに残すはずはない。

退陣をのぞむ＝45％
やめなくてよい＝22％

―朝日新聞の世論調査

福岡県庁の汚職事件が起つてから一カ月半目に朝日新聞では全県下にわたつて世論調査を行つた。「土屋知事はどうすべきか」という質問に対し

やめなくてはいけない	四五％
やめなくてもよい	一三％
その他の答	一三％
答えない	二〇％

以上のように「やめなくてもよい」という声一三％に対し、退陣を望む声が四五％という注目すべき結果が出た。「やめなくてもよい」と答えた者の中でも、刑事責任がないからという見地から明確に土屋知事支持を打ちだしているものは僅か一三％にしか過ぎず、支持を答えながらも関連質問で態度があいまいなもの四二％となつており、支持率の中には弱い層が示され、相対的にみると「退陣要求」はかなり強いものとなつている。

信頼度がガタ落ち

汚職事件を抜きにして、土屋知事就任以来の政治について同様朝日新聞が与論を行つたところでは、三十年四月ともかくも過半数の支持を得て当選した知事ではあつたが、「土屋知事はいままで県民のためになる政治を行つてきたと思いますか。そうは思いませんか」という問に対し

思う	一〇％
思わない	三四％
その他の答	一九％
いえない	二七％

で信頼度がガタ落ちしていることを示している。

また支持政党については

自民党	二四％
社会党	三三％
共産党	〇％
自民色	一一％
社会色	一〇％
共産色	〇％
どれにもしない	七％
答えない	一五％

となつており、社会党支持者は五割近くが土屋県政を「県民のためにならなかつた」と批判し、「ためになつた」と答えたものは一割強しかいない。年令別にみても六十才以上が土屋県政を支持しているだけで、他の年代では批判的なものが多かつた。

うそぶく土屋知事、反省の色は見られない